

『走りよる父の愛』 ルカの福音書 15章11～24節 2015.6.21(父の日伝道礼拝説教より)

『人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。』 ルカの福音書 19:10

◆聖書の中で『父』は、『神・権威と威厳の象徴』を表すことが多い。しかし独り子イエスの語る『父(アッバ)なる神』は、恵み深く、忍耐強く、憐れみ豊かな愛の神だった。

◆ルカ 15 章の『失われた息子』は、私たち罪人の姿そのものである！彼は「財産」を使い果たす(13 節)が、その「財産」とは「本質・存在」の意味がある。彼はお金を無駄にしたのではなく、人生を台無しにした！「放蕩(13)」とは、真面目に、地道に、コツコツ生きることを嫌い、わがままに生きてしまうこと。彼は父の遺産を生前贈与されるも、その使い方について父親の監督を拒否した。まさに『金を出しても口出すな！』である。地味な田舎暮らしを捨て、うるさい兄を離れ、老後の親の介護などまっぴら御免！全てを断ち切って都会へ出て行った。しかし、自分らしく、自由な、のびの人生を夢見た彼は、人生の意味も価値も見失い、結局、自分自身を見失った！

◆無一文となり、飢饉が襲うも、豚のエサすら食べられない。空腹で孤独で惨めな姿となり、初めて彼は『我に返った(17 節)』。「結局俺は、我儘で自分のことしか考えない愚か者だった」と気づき、謝罪の言葉を、自分の言葉で、自分の口で何度も練習して家に向かった時、そこには、息子の帰宅を信じて、ずっと待ち続けていた父がいた。やせ衰え、薄汚く、ボロをまとい、村の誰も見分けがつかないほど哀れな姿の息子に、『まだ家までは遠かったのに(20 節)』すぐに気づいて走り寄り、抱きしめて口づけした。この父の姿こそ、どんな罪人をも愛し、赦し、立ち返る者を駆け寄って抱きしめる『父なる神』の姿そのものである。謝罪と悔改めの言葉を、勇気をもって自分の口で、自分の言葉で言おうとする息子を、一言も責めていない。最上の着物に、子の身分の証である指輪に、靴を用意する父…。これこそ、あまりにも現実離れした、あり得ない、人知をはるかに超えた神の愛である。

◆父なる神は、私たちのわがままをどれだけ忍耐し、どれだけ心を痛めて憐れみ、どれほどの犠牲(御子の十字架)を喜んで払われたことか。この無条件で途方もなく大きな愛を知るとき、私たちは自分の罪を本気で、心から悔いてこの方に立ち返る思いが導かれる。そして、この父の愛のもとで、自分の価値と人生の尊さを実感できる。その愛のもとに、罪を悔いて、自分の口で告白して立ち返るとき、家族・隣人と向き合う者へと変えられ、祈り、赦し、愛し合う者へと変えられていく！